

中東医療支援事業（レバノン） 報告書

村中 千廣 (国際医療救援部主事)

派遣期間: 2019年6月3日～12月15日

派遣地: レバノン共和国・ベイルートほか

二国間事業への派遣

私は2019年6月初旬より、レバノン共和国の首都ベイルートへ派遣され、日本赤十字社(以下、日赤)が2018年より実施しているパレスチナ赤新月社を対象とした医療支援事業の事務管理業務を担当しました。2019年12月13日をもって現地での業務を終えましたので、報告いたします。

レバノンには、1948年のイスラエル建国と同時に難民となった多くのパレスチナ人、そしてその子どもや孫の世代である人々が合わせて約45万人(国連機関UNRWAによる)が暮らしていると言われていています。赤十字の基本七原則により、通常は「いかなる国にもただ一つの赤十字社あるいは赤新月社」とされていますが、レバノンにおいて認められている主要アクター『レバノン赤十字社』とは別に、レバノン国内のパレスチナ難民への支援を主な目的とする『パレスチナ赤新月社』のレバノン支部が存在し、特定の地域(同国内に点在する12のパレスチナ難民キャンプ内、および周辺地域)において活動が認められています。イスラム教が根付いた文化であるため同社は「赤十字」ではなく、白地に赤色の三日月を基調とした赤新月を標章として起用しています。

当事業の活動地は全国に点在するパレスチナ難民キャンプの内部、あるいは隣接地域に位置する病院になります。3年間で計5つの病院支援が計画されており、私が現地で活動にあたった6か月間は、首都ベイルートから40km程南に位置するサイダという都市にあるハムシャリ病院が主な活動地でした。6～12か月間をかけて1つの病院で集中的に活動を行い、順次次の病院へ移行してゆきます。1年目に首都圏にあるハイファ病院での活動が終了し、ハムシャリ病院は2番目の病院となりました。

当事業は二国間事業と呼ばれ、パレスチナ赤新月社(以下、パ赤)が運営する病院の医療サービスの質向上を目的として、日赤と共同で特定された課題を基に目標設定が成され、定められた期間内に各目標を達成するための取り組みが行われています。日赤より派遣された医師と看護師は技術や知識共有の講義を行うだけではなく、実際に現地の職員と共に病院での実務に従事し、新しく導入された技術や仕組みの定着化を図っています。日本から派遣される職員は通常3～6か月の任期で後任者へ引継ぎが行われます。これほどの短期間で文化的背景の異なる医療従事者が有する既存の知識の更新、あるいは刷新を図ることは極めて大きな挑戦であり、日赤のチームにとっては組織的、そして個人レベルのキャパシティ向上が期待される貴重な機会にもなっています。

事務管理要員として

ハムシャリ病院において日赤の医療チームは、トリアージ(重症度に基づき、治療の優先度を決定して選別を行うこと)の仕組みへの理解拡大や、救急室における診療録導入等を大きな目的として活動しました。更に多数の傷病者が同時搬送された際の対応能力向上を図るための訓練が、机上シミュレーションと実技訓練の二段階で実施さ

れました。これは現実的な交通事故や空爆、キャンプ内外での武力衝突の発生を想定したものであり、病院側の強い要望により計画に組み込まれました。

私は事務管理要員として、チームが集中し、各々がキャパシティーを最大限に活用して医療支援の事業に従事できるようにするためのサポートを提供できるよう努めました。この度の派遣で活動にあたったチームでは、活動地である難民キャンプへ赴くための車両手配や安全管理、事務用品購入費用の運用・管理などを定常業務とし、更に和英の翻訳作業や講義資料の英文添削作業等を担当しました。日赤から派遣されている全ての職員は日本国外で活動に従事するための基礎的な語学能力を備えています。語学に関する個々の細かな得意・不得意分野は様々です。また、英語が第一言語ではなく、教育水準にもばらつきがある同地域においては、現地のスタッフと英語を通じて図ることができるコミュニケーションの度合いも様々であるため、円滑な意思疎通のためには着実且つ丁寧な信頼関係の構築が大前提であり、双方からの歩み寄りが不可欠になります。パレスチナの難民キャンプ出身の専属通訳(英語-アラビア語)担当スタッフを含め、チーム一丸となつて的確に日本語からアラビア語への情報伝達を行うよう努めました。



週に1回宿舎で開催された英会話教室

現地の病院の医療従事者を対象とした講義資料の翻訳作業等を行う為には、講義内容の理解を有することが前提であるため、日赤の医療スタッフにはマンツーマンで講義を実施していただき、試みは自身の非専門分野への理解を深める機会となりました。日本国内の異なる地域の病院から派遣されている異職種の職員とのコミュニケーションが活発化したため、各々の日本の職場環境や日赤の医療事業のダイナミズムを知る機会にも恵まれました。

2019年は同国での政治・経済の情勢が一層不安定になり、小麦や原油の不足による物価の高騰や現地通貨価値の下落が相次ぎ、事態は今尚深刻化の一途を辿っています。また、日赤の地域首席代表が不在時に武力衝突等の懸案事項が発生するという事態が頻発したため、情報伝達のフォーカルポイントを担う機会が多く、備蓄を完了させたばかりの非常食や、派遣前に受講したばかりの危機管理能力向上を図るための研修の重要性が再認識される機会となりました。

パレスチナ難民キャンプ

最初の支援対象として2018年に日赤医療チームが活動を開始したハイファ病院は首都南部の『ブルジ・バラジネ』というキャンプの内部に位置しています。僅か1平方キロメートル四方の土地には、認められているだけでも約2万人(国連機関 UNRWA による)が暮らしていると言われていています。長年の間、ひたすら上に建て増しされてきたコンクリート製の住居には多くの人々が暮らしており、日照量は限られ、辛うじて整備されている水道等のインフラには大きな負担がかかっている様子が見受けられまし

た。同キャンプで暮らす専属通訳者曰く、近年隣国シリアの紛争を逃れて移り住んできたシリア難民がキャンプ内の人口密度を一層高めているとのこと。支援団体が活動を行ってはいるものの、廃棄物の問題やインフラ整備等、医療分野の他にも様々な課題が残されていると感じられました。

また、日本と比較すると僅か36分の1程度の国土しかない小さな国ではあるものの、同国に点在するキャンプ間でも、居住している人々の文化的背景や生活環境等には多様性があることが感じられました。3番目の支援先となるバルサム病院は南部の都市ティール(スール)の郊外、『ラシディエ』と呼ばれるキャンプ内に位置しています。道幅は通行車両が互いにすれ違えるほど広く、高い建物が少ない為日照量も豊富です。それぞれのキャンプに異なった特性があるようで、各々が居住しているキャンプや他者のキャンプについて語る論調の差異は非常に興味深く感じました。



ブルジ・バラジネ難民キャンプ内の通り

日本国外の人道支援活動の現場における非医療スタッフの役割の一部を体験させていただいた海外派遣となりました。医療に関する専門知識は有していないながらも、自身の長年の国外居住経験で培われた語学力や思想信条が異なる個々人とのコミュニケーション能力を活用し、微力ながらも医療従事者へのサポートを通じて事業の遂行に寄与することができていたという事実には喜びを感じました。また、短い期間ではあったものの、現地スタッフとの交流を通じて、独特なユーモアや時間感覚、男性同士でも親しい間柄では積極的に交わされるスキンシップ等、レバノンで暮らすパレスチナの人々の温かい人柄を体感できたことや、齎されたフレンドシップは、



ラシディエ難民キャンプの端に位置する海辺から見渡した都市中心部



ハムシャリ病院での最終会議において、既に帰国済みの山田医師(大阪)と益田医師(和歌山)からの感謝のメッセージを代読する報告者。

公私の枠組みを超えて今後の人生の大きな財産となりました。

私が現地を離任した 2019 年 12 月中旬は、同年 10 月中旬より反政府抗議行動が全国規模で継続していたため、安全上の理由から事業地への通勤が制限される機会が増加傾向にありました。依然として現地で活動を続ける日赤の医療チームは様々な挑戦に直面していますが、彼女たちの安全を祈念すると同時に同国で困難な状況に置かれている数百万の人々の存在を覚え、日本にいる私たちが出来ることは何なのかを思考し続けてゆきたいと思います。

日頃よりご支援をありがとうございます。今後とも赤十字・赤新月社の活動へのご支援をよろしくお願いいたします。



現地を離任する日赤職員とハムシャリ病院救急室スタッフとの集合写真